

幼稚園児の生活環境に関する疫学的研究
—日本（福岡市）、中国（杭州市）についての比較—

○久保山博子、石田万喜子、陳 新運
尾崎正雄、高田圭介、本川 涉
福歯大・小児歯

今世界は、交通手段や通信網が整備され、自由に情報交換がなされるようになり、急激に世界は狭くなって来ている。しかし、違った自然や社会環境のなかで生活する小児は、各国で特色が見られることも事実である。当然、口腔を取り巻くこれらの環境も各国で異なり、習慣、食生活などの生活環境、ならびに歯科的概念も大きく違ってくるのではないかと考えられる。

今回、演者らは日本と中国の幼稚園児において、食生活、習慣等についてアンケート調査を行い、比較検討する機会を得たので報告する。

〔調査対象および方法〕

調査対象は、1992年（平成4年）福岡市早良区内の幼稚園児2歳～6歳の男子54名、女子47名の計101名、中国杭州市の幼稚園児2歳～7歳の男子88名、女子85名の計173名である。

事前に配布したアンケート用紙を保護者に記入させ集計を行った。なお、中国に関しては、日本で用いたものと同様の内容を中国語に翻訳した。

〔結果〕

1. 日本では専業主婦が多いが、中国では母親がなんらかの職業をもっているものが、90%以上であった。
2. 日本に比べ中国の方が、よくジュース類を飲む傾向にあることが判かった。
3. 『甘いお菓子の摂取回数と与え方』では、日本よりも中国の方が、子供が欲しがらるままに食べさせていることが多かった。
4. 中国では日本に比べて、よく噛んで食べる傾向があり、また、食事の材料の大きさについても、中国では大人と同じ大きさの物を食べているものが殆どであった。
5. 『歯磨き回数』は、中国では70.0%のものが1日1回で、1日3回歯磨きを行っているものはいなかった。
6. 『乳歯歯科治療の必要性』については、中国の方が日本に比べて、「必要である」と考えているものが、若干低い傾向を示していた。しかし、『保育園、幼稚園を休んでも歯科治療が必要か』という質問については、必要と答えたものが両国とも全体の約6割近くを示していた。

福岡市の学童とその母親の歯科的意識について定期検診来院患者へのアンケート調査—

○岩男 好恵、本田 直子、寺田 ハルカ、田口 共子、中尾 哲之

九州小児歯科集談会

リコール管理を行う上で、現在の子供達の生活や歯科に対する意識を知ることは、非常に重要である。最近、テレビや新聞等で子供達の生活の乱れについて報じられている。その原因としては、塾や習い事、食生活の変化が考えられる。そこで今回、これらの内容を把握し保健指導にいかすため、アンケート調査を行なったので報告する。

【調査対象】

九州小児歯科集談会会員の内、福岡市内で小児歯科専門及び小児歯科・一般歯科開業の8医院にアンケート調査を依頼した。対象者は、定期管理中の小学校4年生から6年生までの学童258名と同年齢の子供を持つ母親269名である。

【調査内容】

学童に対しては、歯磨き及び生活習慣・歯科的意識について、母親に対しては、歯科に対する意識・知識について調査を行なった。

【結果】

（学童に対するアンケート結果）

1. 毎日歯磨きをしていない者が、約3割いた。
2. 口の中で気になる所として、歯並びと回答した子供が多かった。
3. ほとんどが、習い事に通っていた。

（母親に対するアンケート結果）

1. 予防を目的として、来院している人が多かった。
2. 自分自身の口腔内管理を希望している人が、過半数を占めていた。

【考察】

学童においては、高学年になり勉強や塾通いが増え、歯磨きに対する意識が薄れてきている一方、審美性に対する意識が高くなっていると思われた。また、母親に関しては、小児歯科専門医を選んで来院している人が多かったためか、予防を目的にしている者が多かった。それと同時に、自分自身の予防管理を望んでいることから、予防に対する意識の高さが伺えた。

以上の結果を踏まえ、今後とも、学童及び母親の歯科的な知識と意識の向上に役立つ、保健指導を行いたいと考えている。